

旅人海へ



⑤たびくまのもとに、ヒマワリの「里親」たちが集まってくる⑥絵本の作者、はらきょうこさん(右)と中川たかこさん＝名古屋千種区



復興ヒマワリ 絵本に咲いた

名古屋の作家、NPOに協力

絆って何……。保育園に通う女の子のひと言から、心のつながりをテーマにした絵本「たびくまとひまわりばけ」が生まれた。

企画したのは福島のNPO法人チームふくしま。東日本大震災後、「福島ひまわり里親プロジェクト」と題し、ヒマワリの種を各地で育ててもらい、とれた種を今度は福島県内9千カ所余りに植えて復興のシンボルとして咲かせている。

絵本もその活動の一環で、20粒ほどの種を付けて販売している。理事長の半田真仁さん(35)が、名古屋市の絵本作家、はらきょうこさん(26)に作成を頼んだ。かつて通った名古屋市の絵本教室を経営する中川たかこさん(41)に紹介された。

きっかけは昨年6月、半田さんが、福島で咲かせるヒマワリを育てている島根県出雲市の保育園を訪れたときだった。

「なんで種から芽が出るの」「ここは海から近いけど大丈夫?」。子どもたちの質問のうち、6歳の女の子から「きずなって何?」と聞かれたのが印象に残った。東日本大震災以降、よく耳にする「絆」は、チームふくしまでも使う言葉だ。だが、半田さんはうまく説明できなかった。

「心のつながりを、子どもにもわかるように伝えなければ」。半田さんは、震災が忘れ去られないためにも、次世代を担う子どもたちに理解してもらうと絵本作りを思いついた。

「種付き」福島と絆を

絵本に付く種の袋詰めや発送は、福島県二本松市にある知的障害者の通所作業所「和」が担当。絵本の収益の一部を賃金にあて、震災後、特に厳しくなった障害者の雇用を支援する。

出版費などは、インターネットを使って、企画の賛同者から少しずつ寄付を集めた。135人から計168万円が寄せられ、1日の売上金50万円をすべて寄付したロックバンドもいた。

7千冊の印刷と製本は「しまや出版」(東京都)が格安で引き受けた。表紙にラメを入れ、ヒマワリが太陽の下で輝いているように見えるのは小早川真樹社長(40)の発案。「予算がない分、工夫で見栄えをよくした」と話す。

多くの人に支えられた「絆」の物語は、「たびくま」が冬眠から目覚めるシーンから始まる。なぜか森がなくなっており、やっと見つけたヒマワリの芽を大切に育てる。たびくまは、とれた種を友達にプレゼントしようと旅に出る。

作者のはらきさんは「芽に名前をつけたり、絵を描いたり楽しみながら育てるたびくまの友達のように、福島を忘れないで」という思いを込めた」と話す。

絵本は1200円。問い合わせは、チームふくしま(024・529・5153)。(上田真由美)

花畑の「里親」10万人

福島ひまわり里親プロジェクトは、福島県内の若手経営者らでつくる「チームふくしま」が2011年5月ごろから始めた。

ヒマワリは土壌の放射性セシウムを根から吸い上げると期待されたが、農水省の検証で、ほとんど効果がなかった。その後、「太陽をイメージさせるヒマワリを復興のシンボルにしたい」と、ヒマワリを育て、種を福島に送ってくれる「里親」を募った。種はロシア産で、種まきの時期は5月から、60日ほどで開花する。

現在、全都道府県で計約10万人が協力しており、昨年までに5トンの種が寄せられた。広島県安芸高田市の県立向原高校は、最初の年から参加してい

る。幼稚園や小中学校、商工会と育て、昨年は最寄り駅前の商店街に240本のヒマワリが並んだ。収穫した種と応援メッセージを福島に送り、福島の高校との交流も続けている。

静岡県商工会連合会は、まとめて購入。暖かい気候を生かして、県内38カ所の商工会青年部すべてが地元の小中学校などで育てた。昨年は2箱分の種を収穫し、応援メッセージとともに福島に送った。島根県では、女性の前向きな生き方を応援するサイト「出雲bijin」(小村姫久美さん主宰)が、集めた種を「bijin種」と名付け、縁結びと再生の神様の出雲大社のお守りと一緒に、福島に届けた。

古い墓石は土台に使う

土台石に使われ墓石だ。氏名の彫り出していないが、建った黄の面の文字、